

# 「俗」へのまなざし

渡辺  
優

WATANABE

Yu

東京大学に着任して二年目となる昨年、主として教養学部の一、二年生を対象に、「宗教学入門」と題する講義を担当した。どの講義でも話の「つかみ」には毎度頭を悩ませるが、入門講義となればなおさらである。まずはできるだけ身近な話題からと、あれこれ考えた末、「日本人の宗教は多神教的であり、ゆえに寛容である」というステレオタイプを解体してみせることから始めることにした。

初回にアンケートをとり、この主張の是非について、受講生に自由に考えを述べてもらった。その結果、「八百万の神々を信奉する日本に

は複数の異なった宗教伝統が平和に共存している」という典型的回答も混じっていたが、寄せられた回答のうち多くは、上記の主張には賛同できないと答えていた。もっとも、このような問いかけには素直にイエスと答えるべきではないだろうという警戒心が透けてみえるものも少なくなかった。一般命題として肯定することはできないが当てはまる部分もある、という意見も目についた。部分的なイエスという回答の数はむしろ、「日本人の宗教は多神教的であり、ゆえに寛容である」という言説が、日本社会に相当程度浸透している事実を窺わせた。

じっさい、西洋の一神教の「排他性」と日本の「多神教」の寛容性を対比させ、後者の優越を説く言説は、砂漠的風土とモンスーンの風土における人間の思考の性質が根本的に異なりうることを説いた和辻哲郎の『風土』（一九三五年）以来、繰り返されてきた。とりわけ一九九〇年代以降、梅原猛や山折哲雄といった「靈性的知識人」（島菌進）を中心に、一神教⇨排他的・暴力的／多神教⇨寛容という単純な二項対立にのつとる言明が繰り返され、ひとつの言い回しとして定着してしまった感がある。ベストセラーとなった養老孟司の『バカの壁』（新潮新

書、二〇〇三年)にも同様の言説が覗く。

より最近では、二〇一四年九月に臨済宗僧侶の松山太耕が行なったスピーチ (TEDxKyoto) が、「クリスマスと正月が同居する日本」の「寛容な宗教観」を訴えるものとして話題を呼んだ (YouTubeで視聴可能)。さらには、「京大総長・山極壽一67歳がフランスで感じた「一宗教ゆえの欧米社会の行き詰まり」とは」(『文藝春秋』二〇二〇年二月号)なる記事など、枚挙にいとまがない。

「この国は沼地だ。やがてお前にもわかるだろうな。この国は考えていたより、もっと恐ろしい沼地だった。どんな苗もその沼地に植えられれば、根が腐りはじめる。葉が黄ばみ枯れていく。我々はこの沼地に基督教という苗を植えてしまった」。遠藤周作の『沈黙』に登場する「転び伴天連」の沢野忠庵こと、フェレイラの言葉である。むしろこれはフィクションではあるが、「日本の宗教は多神教的であるがゆえに他者に寛容である」という言説に冷や水を浴びせる強烈な批判だ。講義では、最初のパンチとしてフェレイラのこの言葉を引きつつ、日本⇨多神教⇨寛容言説に対して、およそ以下のように反駁を加えた。

まず、「クリスマスと正月が同居する日本」について。この主張には、学生のあいだにもはじ

めから明確な疑義を呈するものが少なくなかったが、要するにクリスマスや正月を「宗教行事」と意識しながら祝っている日本人がどれほどいるか、ということである。多くの日本人はそれらをたんなる「イベント」として消費しているにすぎない。だとすれば、「クリスマスと正月の同居」は宗教的寛容さとはなんの関係もない。それはむしろ宗教への無理解に裏打ちされた「節操のなさ」として批判されるべき事態ではないのか。

これと並行して、日本的多神教は、他者の信仰を蔑ろにする傾向があるのではないか、と指摘することができる。そもそも、「宗教的寛容」や「宗教的自由」という観念は、一宗教文化圏である西洋世界に起源をもつ。個々の信仰の重みを知るからこそ、宗教上の差異を互いに尊重しあう姿勢も生まれる。翻って日本はどうか。寛容といわれる日本社会にあって、自覚的信仰をもつ者は、むしろ肩身が狭いというのが実情ではないか。現に、日本社会において、宗教を信仰する者に対して負の感情をもつ者の割合は、世界的にみてもかなり高いという「不都合な真実」を示すデータがある(詳しくは、堀江宗正「日本人は他宗教に寛容なのか?」『いま宗教に向きあう1 現代日本の宗教事情』岩波書店、二〇一八年を参照)。ある論者の言葉を借りれば、結局のところ「日本人は宗教をなめて

いる」のかもしれない。

さらに、「日本人は多神教的であるがゆえに他者に寛容である」という言説は、それ自体が他者に非寛容でありうる。というのも、この言説はしばしば「一宗教は排他的だ」という、根拠を欠いた他者批判と表裏をなすからだ。一宗教⇨排他的/多神教⇨寛容という言説は、結局のところ、西洋文明という他者に対する日本の優越をいうための図式として作用している。一神教的な「AかBか」という二項対立の思考ではなく、「AもBも」包括するのが多神教のよさなのだというのも、よくあるパターンだ。が、「AかBか」という思考を一神教的であると決めつけ、決めつけることで多神教的な自己の優位を主張することそれ自体、典型的に二項対立的な思考を体現している。

如上の反駁の結果、はじめは「多神教の日本人は宗教的に寛容である」という言説を是としていた学生からも、当初の認識の浅さを反省したという感想が得られた。また、そこに「日本アゲのための言説」を察知して「いやな感じ」を抱きながらも、加えるべき批判を言語化できずにもやもやしていたが、講義を聴いて「すっきりした」という感想も複数寄せられた。

さて、以上のような話をするのは、担当講義を自画自賛するためではない。もぐら叩きのも